

ホルモン

Q&A

Q₁

母乳育児では子宮内膜症リスクが低下するのでしょうか？

〈回答〉

金沢大学医薬保健研究域医学系産科婦人科学 山崎 玲奈
金沢大学医薬保健研究域医学系産科婦人科学教授 藤原 浩

A₁

授乳中は、月経再開が抑制されるため、子宮内膜症リスクが低下することは予測されていたが、今回大規模な20年間以上に及ぶ前向き研究でこれが証明され、2017年に『BMJ』に発表された¹⁾。米国のNurses' Health Study IIに登録された妊娠歴のある女性72,394人を対象に、母乳栄養と子宮内膜症の関連が前向きコホート研究で検討され、母乳栄養期間が3ヵ月増えるごとに子宮内膜症のリスクがハザード比0.92(95%信頼区間(CI)0.90~0.94, $p < 0.001$)で8%有意に低下し、完全母乳では同0.86(95%CI 0.81~0.90, $p < 0.001$)で14%有意に低下することが示唆された¹⁾。生涯に母乳栄養を合計36ヵ月以上行った女性は、全く母乳栄養を行わなかった女性に比べ、子宮内膜症リスクが40%低かったと報告された¹⁾。また、過去5年以内に分娩している女性ほど母乳育児が内膜症リスク低下と強く関連していることも報告されている²⁾。

母乳育児で子宮内膜症リスクが低下する理由としては、分娩後の無月経の影響が大きい²⁾³⁾。また、分娩後無月経は母乳育児の期間や頻度に影響されている²⁾。分娩後無月経中の女性は有経の女性と比較し、低エストロゲン状態であることが報告されており⁴⁾、子宮内膜症病変がエストロゲン依存であることと、月経逆流血が起因であるという説からは、内膜症リスク低下の説明がつく。しかし、今回無月経の同条件でも、混合母乳も含めた母乳育児はハザード比0.98(95% CI 0.96~0.99)、完全母乳ではハザード比0.97(95%CI 0.95~1.00)と僅かであるが内膜症リスクを下げていることも報告され¹⁾、無月経以外の機序でも母乳育児により内膜症リスクが低下している可能性があることがわかった。母乳育児中は、血中のオキシトシン、プロラクチン濃度が高く、エストロゲン、ゴナドトロピン放出ホルモンが抑制されることが知られているが⁵⁾、この変化が無月経以外の機序で内膜症リスクを低下させるかについては明らかになっていない。母乳育児では、ほかに乳がんや卵巣がん、2型糖尿病罹患リスクの減少との関連がいられているが⁶⁾、これも同じように血中ホルモンの変化と長期間の無月経によるという仮説が立てられている⁵⁾。

米国産科婦人科学会(American College of Obstetricians and Gynecologists ; ACOG)は、